

## 「生きづらさ」を訴える発達障害のロールシャッハ反応

－ 二次障害に焦点をあてて －

石 塚 克 己

### 問題・目的

発達障害児・者が感じる「生きづらさ」とはどのようなもので、それは何に起因しているかということがわかれば、彼らへの支援に大きく接近できるものと期待される。しかし、対人的相互関係の質的な問題、コミュニケーションの質的な問題、行動・興味の限定的、反復的で常同的な様式、の3領域に障害がある（DSM-IV・TR, 2002）とされる彼らから、心理面接の場等において自らそのことが伝えられるということは極めて稀である。そこで、本論文では、その手懸りをロールシャッハ反応に求めてみることにした。発達障害のロールシャッハ反応の研究については、近年その実績が蓄積されつつある（辻井ら, 1999, 2002, 2003, 2004）が、まだ一般的法則性を導き出せるほどの積み重ねがあるとは言い難い。しかし、反応数・初発反応時間、反応領域、決定因、形態水準、反応内容、平凡反応、さらに感情カテゴリー、思考・言語カテゴリーとつぶさに検討していく中で、目前にいる発達障害児・者の体験世界や知覚過程を浮き彫りにしていくことは可能であり、ロールシャッハ・テストは発達支援の心理アセスメントのツールとして極めて有効である（明翫, 2005）。発達障害の典型例（一次障害）だけでなく、本論文では、「生きづらさ」を少しでも軽減するための方策として、症状による不適応やネガティブな体験がその後の精神疾患の形成に関連していると考えられる二次障害に視点をあて、二次障害の軽減に寄与する要因をさぐり、生きやすさへとつながるような端緒を見出したい。本研究の目的は、発達障害（一次障害）の特性が、ロールシャッハ反応及びその反応産出過程にどのように現れているか、発達障害の二次障害がロールシャッハ反応に現れ

ているものか否か、現れているとすればどのような現れているか、さらに、それが日常生活の現象とどう対応しているのかということを明らかにしようとするものである。

### 方法

本研究では、「生きづらさ」、発達障害ことにコミュニケーション、対人関係に困難さをもつASD（Autism Spectrum Disorder：自閉症スペクトラム障害）の二次障害に焦点を当て、ロールシャッハ反応について検討した。事例を通してロールシャッハ反応に、発達障害の一次障害と、そこから派生するであろう二次障害を検討し、さらに同様のことがSCT（文章完成法テスト）、WAIS-IIIからも窺えないか、テスト・バッテリーを組み、ロールシャッハ反応を補完した。

**研究協力者：**対象事例Aとして高校生男児1名、参考事例B（30歳代男性）、参考事例C（50歳代男性）の計3名。対象事例Aは、「高機能広汎性発達障害」と診断され、その二次障害として不登校状態に陥り、日常をどう過ごしていったらいいのか戸惑い、毎日が生きづらいと訴えていた。また、対象事例Aの状態像をよりの確に捉えるために、「アスペルガー障害」との診断を持つ参考事例Bと、未診断ではあるが、発達障害様であり思春期以来約40年間、生きづらさを抱えてきた参考事例Cについても比較検討を行った。**期間：**X年Y月からX+2年Y+3月。**場所：**Z大学大学院心理臨床相談センター、公共施設等、守秘可能であると判断できる空間。**面接および心理査定の手続き：**調査の実施に際し、協力者に、研究倫理遵守に関する誓約書、研究協力依頼書についての説明をし、同意を得た後、面接および心理査定を実施

した。心理査定はロールシャッハ・テストを基本に、SCT、WAIS-IIIの3種を実施し、ロールシャッハ・テストについては、協力者の日常生活の現状に合わせ、一次障害を見出すために約半年の間をあけ、各人につき2回施行した。なお、ロールシャッハ・テストは名大法に従った。

### 結果・考察

発達障害とりわけASDの特性について、様々な傾向が述べられてはいるものの、共通した一定の見解は得られておらず（北村ら、2006）、心理検査の反応産出過程でどのような特徴があり、それが日常生活の現象とどう対応し合っているかに着目することによって、臨床心理学的援助に貢献することが可能になるのではないかという内田ら（1999）の見解が支持された。

#### ①ロールシャッハ反応にみられる一次障害の特性：

対象事例Aには、反応数が少なく、反応時間が遅い等の特徴が、参考事例Bには、反応は速いが、W%が高い、Tur%の低さ等の特徴が、参考事例Cには、W%の高さ、C.R.の低さ等の特徴が見られた。

②反応産出過程：対象事例Aは、問いかけにどう答えたらいいのかわからず、一生懸命にそれを探してはいるが、反応に時間がかかっている。決して努力不足でないということが理解される。参考事例Bは、問われることに自分のペースで淡々と答え、頻繁なエコラリアが見受けられる等、アスペルガー障害の特徴が強く感じられた。参考事例Cは、自説の正当性にこだわり、それが奇異なものであっても曲げることなく反応を産出していた。

③二次障害：再テストで反応数が増え、以前とは異なるソフトな感じの対人認知ができるようになった対象事例Aの変化が、最も顕著であった。これは、二次障害に関する改善の兆しを示唆するものと考えていいのではないだろうか。

④日常生活の現象との対応：3事例を比較すると、日常生活においても、参考事例B、参考事例Cに比べ、対象事例Aの変化が最もダイナミックであっ

た。特に感情面の変化は大きかった（感情面の揺れは、思考、行動等に先立ってこれらに大きな影響を及ぼすものかもしれない）。その他3事例は、緘黙的であったり、頻繁なエコラリアがみられたり、かなり強い固執性を持っているなどの一次障害に加えて、不登校、強迫的行動、パニック障害による入院歴等、二次障害にも苦しんだ経験を持つ、あるいは治療中であった。ロールシャッハ反応においては、認知の仕方や、感情の不安定さにその特徴が見られた。他人の視線がとても気になり、それぞれ特有の見方をしていることが明らかになり、それは日常生活においてもみられた。SCTにおいては3事例とも自分の悩みや日頃のやりきれなさが吐露され、WAIS-IIIにおいては三人三様ではあるが、得意、不得意の領域やその程度等がかなりわかるようになり、今後の心理面接や日常生活の場面での関わり方や支援へのヒントが直接、間接に得られた。

以上のことから次のような結論に達した。

(1)発達障害の一次障害の特性は、初回テストと再テストの2回の検査を実施し、その共通点を見出すことで明らかになった。さらに、スコアリング（数値）や反応内容だけでなく、その反応産出過程が重要であり、表情、態度、言葉づかいなど、非言語的表現を丁寧に観察し、分析することで、個別的な障害特性を見出すことができるのではないかと考えられる。また、(2)発達障害の一次障害の特性を明らかにすること、一般的な障害特性に共通しない、個別の反応を見出すことができた。さらに、それが、日常生活の現象とどう対応しているのかを検討することで、臨床心理学的支援の視点を見出すことができるのではないかと考えられる。

生きづらさや二次障害は、ロールシャッハ・テストのスコアリングや反応内容等で見られる以上に、反応産出過程によく現れていた。この反応産出過程を丁寧に検討していくことで、生きづらさや二次障害を深く理解し、支援に生かされていくと考えられる。